就任のことば

住谷悦治

教えるとは　共に希望を語ること
学ぶとは　真実を　胸に刻むこと
ルイ・アラゴン「大学歌」の一節

「学校法人　同志社寄附行為」の第二条「本法人は、教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教を徳育の基本とする学校を経営し、もって教育の実を挙げることを目的とする」という条項があり、第四条において「総長」職について、「前条の各学校（第三条の十の学校を指す――筆者）の教学を統轄するために、この法人に総長を置く」と規定されている。総長は全同志社の「教学」を統轄する責任を負わせられているというわけであるが、この条項を、じっと見つめているだけで肌えに粟を生ずるほどの責任の重大さを感ずるであろう。だれか、よくこの条項にたいする適格者たることの自信を有ちうるであるうか。学友会の名おいて、チャペルの前に、あの大きな看板に、「総長不適格者の住谷」と大々的に公示し、過去四年間にわたるわたくしの無為・無能を痛撃されるまえに、わたくしは、学生諸君よりも、もっと早く、もっと痛きまで、自分の才能の限界を知っているのだ。齢七十歳を越え、苦難の生涯も幾分なりと経験し、人生の終着駅を前方雲霧のうちに展望しているわたくしが、何を好んでか身にあまる大任を引き受けるなどと学友会諸君からの阻止的・御節介を必要としょうか。

新島先生・デビス先生とともに最初の同志社教師として、五十余年の長年月を、まったく挙げて同志社教育のために捧げつくした稀れにみる碩学ラーネッド先生は、先生の「回顧」の中にも、「同志社と別れることば」の中にも、「未だ知られざる行径」を信じて同志社に来たって新島先生に協力したと回顧された。人生には、まことに自分一個人でどうにも処理しつくせられない知られざる行径があり、明日の生命さえも保し難いものである、その中に生きつづけているのである。

職業は、いかなる部面を受け有つとしても、社会における人間としての必然的な定めであり、それが、適材・適所に恵まれるということは、とくに資本主義社会においては困難である。それにも拘らず、与えられた職業を、神の思召しとして受けとり、(動詞の berufen が名詞の Beruf 職業となる自覚) そこに打ち込んで、適・不適に拘らず、慣れるまで魂を打ち込んで生きぬくことにおいてこそ、使命感も湧き、さらに義務感も湧くものであり、人生としての生き甲斐を感ずるものである。中学時代に船乗りを目的としたわたくしが、高等商船学校の入試にしくじって、やがて学校教師の道を辿り、適・不適に頓着なしに与えられた道に向って努力し、打ち込んできた。人生は思いがけない「行径」を受難という消極的な考え方から、生き甲斐ある生涯への精進として、希望を語りつつ、真実を体しつつ生きなければならないのだ。人生とはこういうものなのではないか。

わたくしはある外国の十七歳になる少年の告白を人づてに聴いた。彼れは、手におえない不良少年であり、飲酒・遊楽・盗み、喧嘩等々、いやしむべき行動のため、少年鑑別所に入れられた。そこでは神父さんも、先生も、判事さんも一度も自分の過去のことを聴きもせず追求もせず、ただ前途の人生の希望と勇気と努力とだけを語ってくれたという。過去の能・不能、適・不適、罪・咎を、あげつらうことによって、他人および自分たち人生にどれだけのプラスがあるか。石をもって打たるべき人間どもが、罪を犯した一少女を石打ちすることができなかったことが、聖書に記るされてある。まさにそのとおりの人生行路であり、それが人生の真相ではないのか。

わたくしは九十二年の起伏ある、さまざまの歴史を織り込んだ同志社の歴史を調査しているひとりであり、同志社の苦難、二度、三度壊滅に瀕した沈痛極りない歴史的事実を知っている。同時にその苦難をば全同志社人の祈りと協力によって切り抜けて来た事実も知っており、その直接の衝に当った当局者の筆舌につくしえない苦痛と努力とを知っている。その歴史の上に立つ九十二年の同志社の一時期に総長となることが、いかに辛らいことであり、いかに責任が重大であることを自覚している。二年間、三年間、四年間をあっさり過ごしている若い人びとに警告や注意を受けるまでもない。もちろん、それらを拒む理由は一つもない。すべては同志社の円満な、すくすくと伸びゆく発展の道への栄養であるのだから。同時に、その重要な職業を負うている当局の一人であるからである。

幸いにして、同志社は、明快な、健全な、確固不滅の立学の精神が一貫している。それは単に最初に掲げた条項だけではない。キリスト教精神とそれに基づく教育とは、新島襄先生の生きた精神と生涯に体現されている。先生に協力した先覚者山本覚馬、情熱を燃焼しつづけた宣教師デビス、理性と真理探究と知性の権化ラーネッド先生という、現実に創立当時から生きた人間として神の子として、わがキャンパスの中に生き抜いたという柄として明らかな歴史的事実として現に全同志社人の心ある人びとの中に生きつつある。のみでなく、その後の多くの同志

社人が協力して支えてきたこの同志社という共同社会体が眼前に展開しつつあるのだ。夢や言葉や単なる感傷的回顧ではない。現実の同志社の中にそれらの生命を燃焼しつつあるのである。少数当局者、役付きの人びとのみのではなく、全同志社人の協力によるものであったし、またあるべきものである。

総長は実力者でなければならぬと、ある教師はいう。もしその教師のいうように、教学の全責任を負う総長個人――仮りに現在のわたくしに、真に「実力者」たることを要求するなら、わたくしは、全教師の授授的・学問的・教育的な姿を徹底的に批判し同志社教育の本旨に照して考えねばなるまい。かりに大学教授ならば、㈠よき教授として、よき講義、キメの細かな納得しうる講義を忠実にしうるか。㈡教授としてのみでなく学者として内部・外部の学問的水準を保持しつつあるか。学術論文も書かず、特質ある著書も公にしないならば、何をもって学者として学界にその実力を示しうるのか。批判の標準や尺度を示さなければならない。㈢教育家として、この尨大な数にあえぐ学生、大衆の中の孤独、大学生としての本分をつくしえぬ学生と如何に接触し、意思や感情の疎通を実践しつつあるか。その困難をも教学の責任者として実践して行くことになろう。それに堪えうる教師の多いことを切望する。「実力者」などといってわたくしはそのようなことを教学「実力総長」としてしたくないのみか、そのようなことは、総長の負うべき全責任か否か。

学友会の公示にいうように過去四年間に果して大学の学問的水準が貧困化したか。もしそのようなことがあるならそれは教授たちの責任ではないのか。わたくしは、同志社大学教授の学問的水準が一般的に過去四年間に低下したなどとは夢にだに思わない。まさにその反対であることを信じている。

ただ総長としては、教学の責任を負うているかぎり同志社大学のためとはいえ、大学としては平等な他大学に迷惑をかけてまでも、教師の引き抜きを避けて欲しい。そうしたことは他大学の教授会の完全な了解のもとに行うべき、学界の不文律があるのみか、一つの道義上の問題である。そういう場合には、他大学や社会から教学の全責任を負うという触れ込みの総長が責任を問われるのである。そうした不道徳をしてまでも学問的水準を高めるとか教授陣を強化するとかいう呼称は、白昼、人をあざむくものである。

いずれにしても、経営においてはとくに「実力者」云々は問題となるであろうし、幸い同志社においては、その点、意を安んずるものがある。理事長や経営当事者と総長職とを混同して実力者讃美を総長職に強いる教師・学生は、まさに天に向って唾するものであるのみか、総長にたいする無用な重圧となることであろう。わたくしは、敢えて、光栄と苦難と起伏ある大同志社の総長が、社会的にも個人的にも適材・適所などとは夢にだに考えたことがないのみか、面と向って「無能」呼ばりされても堪えてきた。今後も個人としては堪え抜くことであろう。それがこの世に与えられたわたくしの「見えざる行径」としてまた、この世の「なりわい」としてのBerufであり、わたくしは、それをば神のberufenとして受けとるつもりである。それ

は新島先生および山本覚馬・デビス・ラーネッド諸先生の身をもって教え給うたところのものである。教えることはともに希望を語ることであり、学ぶことはこの人生の真実を胸に刻むことである。

個人的のことはここでとどめよう。とくに全学としてみるとき、いよいよ事は重大である。㈠多数の学生と教職員との交流の問題が困難であること、新島先生の遺言にもあるように機構の老大化は官僚化を必然悪ならしめる。これは国家においても同様であり、レーニンさえも死前にそれを警告したほどである。いかにして官僚化を防止すべきか。㈡各校および大学各部間の意思の交流・疎通も停滞がちでないか。各部評議会があっても各部の意見が統一的に表現しえない。やはりマックス・ヴェバーのいうように、「神々の闘争」となる。いかにして、この交流と統一的な意思表現を可能ならしめるか。㈢学生運動や暴力問題は、全国大学共通の問題であり悩みであるが、教員数が学生数に比して相対的に少数であり、教師はそれぞれ授業の職責に多忙であるのみでなく、資格ある人、特殊専門教授は二つ三つと他校へ出講しているが、そのことは他大学でも、それぞれの専門教授の不足を訴えている証拠である。そのようなとき多数の学生との交流は非常に困難な不可能にも近い重荷である。㈣教授会における神々の闘争は、例えば学生処分の問題についても硬軟の一致点を見出しえないであろう。学校全体としてどうしたらよいか。㈤しかし学生は、それぞれの大学ですでに受け入れているのであり、同志社においても、もちろん受け入れた以上は、責任をもって教育し有為な人材として社会に送り出さねばならない。たとえ、それが暴力学生であっても徒らに厳罰、放校せしめて果して大学の社会的責任は完了しえまい。あくまで大学で抱きかかえて訓育に全力を挙げねばならない。つき放すことは非同志社的であるばかりでなく、一般大学としても責任回避的問題ではあるまいか。

これらの大学学生問題は、単なる個人の説教や精神的な問題として解決しえないであろう。現代大学の学生数と設備と、教職員の数との機構の問題と結びつけて解決の方向や現実の手段を考慮しなければならないことである。

わたくしは総長再任にあたって、これらいくたの深刻な問題に直面して、徒らに悩んでばかりいるだけではダメであること、全学協力して、解決への具体策に着手しなければならぬことを痛感し、不断に提唱する。

（同志社総長）

大正期の徳富蘆花

――『新春』から『富士』へ――

平林一

父の死

一九一四（大正三）年五月二十六日の未明、蘆花の父、徳富一敬が死んだ。

「一向悲しくない。涙が出ない。却々のうのうして、朗になって、嬉しい気もちが一ぱいだ。夕飯に赤の飯を焚いて、尊翁の彼世への引越し、第二の誕生を祝ふ。」

その日の日記に、蘆花はこのように記している。父の病床を見舞わず、臨終にもかけつけず、葬式にも列席せず、墓参もしなかった蘆花は、十四年五月から十七年五月までの満三年間家の門を鎖し、ひたすら喪にふくしたのであった。最初の一年は「喪中面会御断り」次の二年間は「面会御ことわり」の札を張り通した。最後には「面会及文通御ことわり」の札さえ張った。蘆花は書いている。

「此三年間に、郵便屋、牛乳屋、新聞屋の外門を入った者は数ふる程しかありません。血族長者で門から帰った人もあります。随分遠方から来た方もありましたが、私は会ひませんでした。私の読者、私に好意をもった来訪者の多くを私は失望させ、嗔らせ、哀しませました。高らかに嘲笑して帰る人、押強く門にかかって私を嗔らせた人もありましたが、貼紙を見て悄然と帰り行く足音が一番私の胸にはこたへました。勿論三年閉門しても、顔色憔悴形容枯槁の孝子の喪を致した訳では決してありません。精進潔斎は以ての外です。涙すら唯の一滴も出ないのですもの、死んだ父を門番に立たせて吾儘放題をした、といはれても否とは申されません。」（『新春』）

一般常識の目から見たならば異常と思われる父の死をめぐっての蘆花の行為は、なぜ起ったのであろうか。

蘆花にとって、父は「過去」の象徴であった。それならば、蘆花の「過去」とはどのようなものであったか。

蘆花は二十九歳の誕生日（明治二十九年十月二十五日）につぎのように書いた。

鳴呼吾は久しき奴隷にてありしよ。

家兄の奴隷なりき。
情欲の奴隷なりき。
あらゆるものの吾は奴隷なりき。
今より後、吾また決して奴隷たらじ。
何人にもあれ、何ものにまれ、
わが自由を礙ぐるものあらば、即我敵也。

父と子、姑と嫁、主婦と家婢、上役と下僚、古参と新参、先輩と後輩、将校と兵卒などすべての日本的秩序の中では、自由な近代的個人は息づくことができない。しかも満二十歳にして家長の位置についた兄蘇峰猪一郎を常に頭上に感じていた弟蘆花健次郎は、「負け犬」であった（荒正人「負け犬」）。儒教的な権力主義がそのささえであり、天皇制がその上に立っている古い「家」の秩序とのたたかい、それを宿命的に課せられたのが蘆花であった。近代日本の「家」の秩序との対決、それを通して、魂の奴隷的状態からの解放、自己確立を意図した蘆花であった。その悪戦苦闘のドキュメントとして生まれたのが、『不如帰』『自然と人生』『思出の記』『黒潮』などの作品であった。文学者として経済的にも自立した蘆花は、第一のたたかいの果に、とうとう「告別の辞」を兄に対して書いたのである。

君は国力の膨脹に重きを置きて帝国主義を執り、余はユゴー、トルストイ、ゾラ諸大人の流れを汲んで人道の大義を執り、自家の社会主義を執る。

「告別の辞」が書かれたのは、一九〇三（明治三十六）年一月のことであったが、父一敬が母久子に対して「勝ち犬」ではなく、むしろ「負け犬」であったことによって、「家」の秩序のなかではげしい劣等感に悩む自分の姿を、蘆花は父に見てきたのであり、そのはげしい劣等感の裏がえしが家長たる兄への反逆の大きな要因となっていたのである。

アダムとイヴ

その父が死んだ。蘆花は解放と自由を感じた。第二の誕生である。第二のたたかいが始められなければならぬ。今まで自分は不自然児であったと蘆花は考える。

「不自然児も実は皮をかぶった自然児であったからであります。然し第一、第二の失恋（第一は母に対して、第二は山本久栄に対して↓平林）で己に劇しい打撃を受け、父の孔子と母の耶蘇の間に不徹底な克己と服従を強いられ、兄の軽蔑と周囲の侮蔑は眼を瞑って馬鹿の名目に自分を任せ、内に燃ゆる憤慨を踏みつけ踏みつけ死んだやうになって居た押曲げられた不自然児、突放した母の手に性欲の内攻した不自然児は、罪の無い自然女児に対して、決して好い夫ではありませんでした。随分吾儘な不良人でありました。第一、第二の失恋の復讐が、罪ない彼女に落ちて来たのであります。」（『新春』）

エデンにおける自然男自然女の赤裸の生活を始めるために、蘆花は閉門三年の生活を送ったのだ。

「死は直ぐ誕生ではありません。骸は一旦墓に葬られねばなりません。再び生れるには、矢張再び母の腹に入らねばなりません。骸は一旦 Mother earth の腹中に葬られて、其処から新生が芽ぐんで来るのであります。私の閉門三年は墓の中、また母胎の中の生活であ

りました。虫類の冬眠と申してもよい。戦闘準備が整ふて打て出る迄、城門を堅く鎖した籠城生活と申してもよい。」（『新春』）

かくして、自然男自然女、アダムとイヴは生まれた。「春信」（『新春』）はつぎのような賛歌によって結ばれている。

生が勝った。
愛が勝った。
光が勝った。
自然が勝った。
阿父が勝った。
子供が生れた。
アダムが生れた。
イヴが生れた。
春が帰った。
埃田に帰った。
埃田の春は嬉しいな。
阿父は偉いな。
阿父万歳！
埃田の春万歳！
偉い偉い偉い阿父万万万々歳！
亜孟！　亜孟！

小説『黒潮』は未完に終っていた。その続編『十年』を蘆花は書こうとした。しかしわずかでそれも打ち切られた。読者への弁明には、つぎのように語られている。

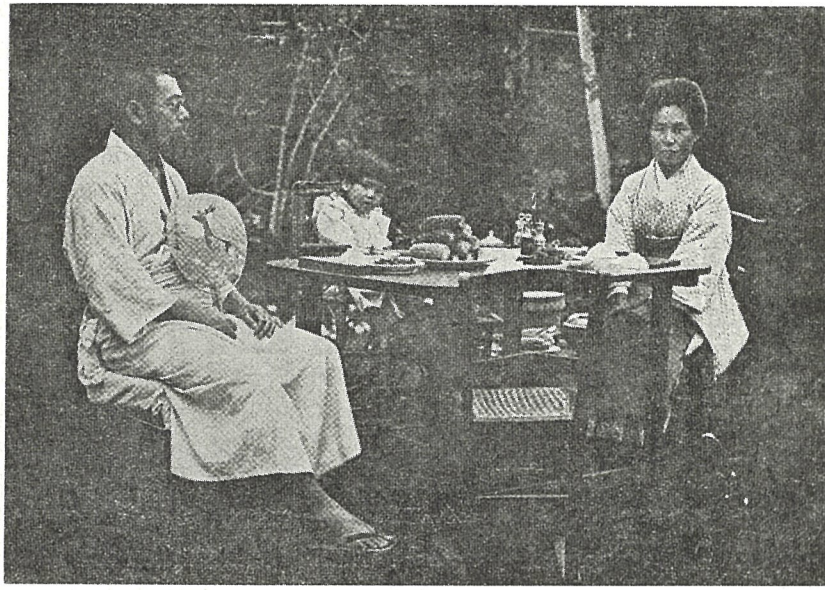
「読者諸君及び国民新聞社諸彦、突然ですが、僕は、小説『十年』を中止します。実は最初着筆の際は、外から内へと郎かず離れず書いてのけやうと思ったのでした。愕然吾に復って己が態度の不真面目に気がつくと、最早いやになった。此れではいけぬ。全然態度を一変し、あらためて内から外へ書くのでなければならぬ。そこで断然新聞掲載を中止し、開巻第一章から暇に任せてゆるゆる書直し、心ゆく程書いて、完成の上は適当の時期に適宜の方法を以て発表することに決したのであります。」

一九一三（大正二）年六月のことであった。父の死の前年のことである。「内から外へ」という言葉は、「自分から他者へ」又は「主観から客観へ」ということであろう。この時期、すでにして蘆花は単なる外部描写ではあきたらなくなってきていたのである。客観小説ではつかみきれぬものを自分の内部に感じはじめていたのである。それが父の死とかさなった。自己の存在のとらえなおし、蘆花は自己及び周囲の徹底的な抉出をはじめなければならなかったのである。「粕谷の聖」からの自己脱却、定型の超克というたたかいがはじめられた。第一のたたかいであった自己確立から、第二のたたかいは自己拡大へと展開していったのである。

第二のたたかい

決定的な自己摘出が、妻にもかくしていた青春の恋物語の告白からはじまった。それが『黒い眼と茶色の目』（大正三年）である。

「私は『黒い眼と茶色の目』を書き始めました。……私は一ヵ月でそれを書き飛ばしました。私は一切無意識でしたが、私の衷には母や兄に対する私の怒が燃え上らうとするのを抑へ抑へてぷすぷすい



徳富蘆花夫妻――新潮社版「蘆花全集」より

ぶって居たのでした。父死して三年と八月の間、一滴の涙も落ちなかったのも、私は一旦之を自分の非情冷刻に帰して見ましたが、実はさうでない、私の押さへ押さへして居る怒の火焔が、私の涙の泉を焼き涸らしたのでありました。私の書いた彼変体告白に事実の相違は断じてありません。意識した復讐の曲筆は、決して唯の一字もありません。然し全篇を通じて流るる底流は、愛のそれではありません。嚙み殺した怒の皮肉が、全篇を奔って居ります。私はあの書で私自身をすら愛して居ません。否、私が私自身を愛したら、一切を愛するが自然です。然し其当時の私はまだ純赤裸のアダムではありませんでした。ただ身近い襯衣を一枚脱いだだけでした。」(『新春』)

脱衣はたりなかった。告白は『新春』(大正七年)へとつづいてゆく。『日本から日本へ』(大正十年)においては、『新春』に約束された第二のアダム(日子)とイヴ(日女)の姿が、その世界観・信仰・思想・趣味・性格の一切をあげて、旅行記の形式によって告白されている。また『竹崎順子』(大正十二年)も書かれた。その間に蘆花は、再臨のキリスト、第二のキリストは蘆花その人であるというところまで自己拡大をなしとげるのである。蘆花はもはや十字架を背負いつづけたが故に、十字架の時代は過ぎたと宣言したのである。再臨のキリストは妻帯して居り、その女はベタニヤのマリヤのよみがえりであると蘆花は言い、愛子夫人がそれなのである。蘆花は自分が妻とともに宇宙の中心であり、そこから民族や人類の問題も考えるようになったのである。ともかく、彼のこの時期におけるキリスト教信仰は、自我を神とする自我肯定の結論から導き出されたもので、正統的なキリスト教とは到底よぶことはできない。だ

が、自己に忠実であろうとして現出された独自の信仰風景に、われわれは驚異の念を抱かざるをえないのである。

晩年の大作『富士』（大正十四～昭和三年）は、『新春』の不十分さをおぎなうために、すでにはやくから予定されていた作品ともいうことが出来よう。『富士』は、一八九四（明治二十七）年蘆花が新婚家庭をつくったところから起筆され、一九〇六（明治三十九）年にトルストイ訪問の巡礼紀行に出かけるところで終っている。蘆花夫妻の共著であり、夫妻の生活記録とも言える。これもまた大胆な告白の書であった。また懺悔の書でもあった。再臨のキリストは世の罪を負う神の小羊となった。愛子未亡人は、「良人はこの小説（富士）がをはりましたら、文壇の方々とも自由にお交際をしたいと云ってをりました。そのうちに、たうとう、あんなことになりまして。」と語っている。小説家の本能として蘆花もまた本格小説に脱け出したかったであろうが、自分を赤裸々に報告してからという誓約が蘆花をきびしく規定していたと、前田河広一郎（『蘆花の芸術』）は書いている。『富士』はとにかく当時の文壇にとっては型破りの小説であったのである。

「『不如帰』や『思出の記』や『黒潮』（明治三十六年）では小説家であった蘆花が『富士』では小説家でなくなっている。この帰結は重大であり、それが放棄されていたら、『富士』の制作と出版は、『新春』の執筆中からさえ予定されていたとは言えなくなるであろう。小説としての肉づけは、文壇人が考えているような性質のものではなくて、塵埃の山の構築であり、『古い物や、新しい物や、生れ立ての物や、半ば腐った物』を運んで来、運んで去る大洪水の放出だったのである。偉大な手腕を持たなければ、そういう事はやれないし、その偉大な手腕を強いて文学的と呼ぶ必要はない。」（鑓田研一「『新春』と『富士』について」・『明治大正文学研究』第二三号・昭和三十二年十月刊）

『新春』から『富士』に至る放奔豪華な告白録は、伊藤整が「逃亡奴隷」と名づけたところの明治以来の自伝小説家（私小説家）の書いたものとは質的に異なっている。五十年の歳月の間に、溜りに溜った自己の堆積物をすべて吐き出して裸になるというのが蘆花の目的であったのだから。その自己告白、自己懺悔がとりもなおさず、近代日本社会における儒教的権力主義の秩序に対するたたかいであったのだから。

一九二七（昭和二）年九月十八日、徳富蘆花はたたかい途上において死んだ。それから四十年たった。彼が残した後代人への問いかけは複雑なものである。われわれはその課題を解きほぐしてゆかなければならない。

不思議なことに、十字架のキリストは蘆花の死の彼方にも生きて働いている。

×　×　×

×　×　×

（商高教諭・国語）

私の見た健次郎叔父さん

久布白落実

本文はさる10月25日、大学アッセンブリー・アワーで講演されたものを、収録編集したものです。　編集部

百年のわくの中で——叔父と私

一八八二年十二月十六日は私の生まれた日なんです。一八六八年、これは明治元年、徳富蘆花の生まれた日なんです。私が生まれました時に徳富蘆花という人は十五歳の少年であった。私の両親は結婚問題でだいぶん騒いどったと見えまして、まあまあこの夫婦に子供ができたのはよかったと親たちもほっとしたような気分でした。母の両親のいる熊本の徳富家では、何か祝いものを作って、その十五才の少年に持たせて、熊本から六里田舎にある山鹿という所にテクテクと使いにやった。これがこの世の中で徳富蘆花と私に関係のあった第一回でございます。私は生まれたばかりですからどういう少年であったか知るはずもありません。

その次に私が蘆花という人を初めて見ましたのは十三歳の時であります。徳富蘆花はその時には二十七歳になって、妻を迎えておった。有名な蘆花夫人と言われるあの夫人を迎えたばかりでございました。私は、その頃、なんでも子供の神経衰弱というのになっとって、十二、三歳の時に不眠症になって、しょうがないから祖母の所に頼んで、浜にやって一夏養生させたらば良くなるかも知れんというので、群馬県の藤岡という小さな町から父に送られて、一人で汽車に乗って、東京へ着いた時、私を迎えてくれたのは徳富蘇峰でありました。

蘇峰とはどういう関係かといいますと、私の母は徳富音羽といいまして蘇峰にも蘆花にも姉にあたります。そういう家庭でございますが、十三歳の時に私はそうやって送りつけられて蘆花にあったわけであります。

その時見たところの蘆花はどんな人かと申しますと、ちょうど若竹のようでございました。竹というものは御承知のとおり、すっくりと立ちます。その色は、青であって、白くて、すっとしておって、葉なんかは出ていない。折れば折れると思うように、まだ本当の竹になっていない。実にスクスクとした姿でありました。その叔父が、徳富猪一郎から私を受けとって、二、三日東京で見てくれました。

初めて会った若妻、蘆花夫人が「オチミしゃん」と言って私を迎えてくれました。そして蘆花には、終生、私はオチミしゃんと呼ばれて暮らしました。オチミしゃんを連れて蘆花は赤十字へいったり、逗子の海岸へいったりしてくれたのはその時です。

四十年にわたる蘆花の文筆

この蘆花夫婦は赤坂の氷川町に、徳富蘇峰のすぐそばに一軒家を持っておりました。御承知のようにこの人の生涯は、明治元年に生まれて、そして二十歳頃からぼつぼつ筆をとって、六十の時はもう死んでおります。それで働いたのは二十歳から六十まで四十年間、昭和二年、一九二八年までございます。今日はその六十から百年になりました。百年目に八十五歳の私が蘆花の記念の物語りをしに、ここにまいった因縁を私は今朝一人で感じていたようなわけでございます。

この四十年間のこの人の動きというものはまことに面白いものでございます。御承知のようにこの人の全働き、四十年間に彼が筆をとってやりました事柄は、全集として二十巻出ております。しかし、その二十巻を誰がまとめたかと言うと、妻の蘆花夫人です。蘆花は最後の「富士」というものを書き始めましたけれども、第一巻、第二巻、第三巻といって、第四巻はとうとう出なかった、生存中は出なかった。この人は、どういうふうにしてこの徳富の家で育ったか、どういうふうにして彼がその文筆を運んだか、彼の青春の時期はどうやったか、また彼が死に至るまでどういう戦いをし続けたかというようなことを、私の目に映った、私が見ることのできた人として話したいと思います。

御承知のように、蘆花は、八人兄弟のうち八番目でございます。上に五人女姉妹がございました。男は下に三人（うち一人夭折）、兄が徳富蘇峰であって、蘆花が一番裾の息子でございました。

その家庭というのはどういうのかと申しますと、徳富淇水、久子夫婦の間に生まれたものでございます。淇水という男性はどんな男性であったかと申しますと、実にしっかりした四角四面な人でありました。勤直な人で勉強家でありました。この人のそばにすわっていると、もう足がしびれるように感ずるような人でございました。しかし、久子という婦人はこれは又、闊達な婦人でありました。久子夫人があの乃木将軍の御夫婦がなくなられた時に、「乃木さんがなくなりましたね、とんだ事でしたね」と言うと、久子夫人は「死ぬというのは敗北たい。」ずばりとやって……まあ、それは、誰がそんなに簡単にそういうことをいうでしょうと思うくらい、誠に闊達な婦人でありました。

蘆花自己解放の戦い

蘆花はこの父と母の下にあって、七人兄弟の一番すそとして生まれてきましたので、愛されることには不足なかった。兄弟からも、その父母からもあらゆる周囲の人からも、愛されることは不足なかった。けれども、人間というものは愛だけでは足りないものであります。蘆花の心の中にいつもいつもあったところのものは、自分が人間としての重圧を始終感じていたことです。その蘆花をしみじみ知っとったのは、一番よく知っとったのは、誰か。乳母でありまし

た。みんなが「ちいぼっちゃん、ちいぼっちゃん」といっているのを自分の背中にこうかついで「この人の魂があああた(貴殿の意)」とこういう。この人の魂、あなた方が可愛い可愛いとおっしゃるけれど、この人の魂は容易なもんではない、ということを言ってるんです。

兄の徳富蘇峰は御承知のとおり頭からいっても、事務からいっても、会計手腕からいっても、思想的にいっても一流型の男と私は認めています。その一流型の、ことに責任感のかたまりといっていいくらいな男でありました。生まれた時にもう五人の女ばかりで父が待って待って待ちこがれたところへ生まれてきた息子でありますから、この子に、というのでもう一家の希望も責任も何もかもその蘇峰の上に打ちかかってきました。これを小さな体にがっしりと受けとめて、八歳の時には願をかけて「私は酒やたばこはのみません。将来、私はこれで一家をなさねばなりませんから」といって願をかけて、父母はもちろんのこと、五人の姉妹をもことごとく自分の責任と考えておった人らしい。それで彼はその責任感のかたまりとしてできていましたから、自分に対しても人に対してもなかなか厳しいものでありました。それが兄でした。兄でありますから弟のことはむろん自分の責任と思っております。五人の姉というのも一人は、湯浅八郎元総長の母であられる湯浅初子、私の母の大久保音羽、その上にもう三人、どれもこれもまあまあ当り前の婦人としては風変わりな連中であります。その姉さんたちが、上にすっくとのっていた。それで可愛いがられはしたけれども「健さん、健さん」と言って、何かと言えば、もう使いものにするような、そういう扱いをされることはまことに不満であったらしい。それでこの人の魂の中に、家族というものは愛の魂よりも重圧として感ずることが強かった。

徳富蘆花

その母は非常に闊達な人であり、兄に対しても立ち向うくらいなおばあさんでございましたから、この末の弟はもう手の中に入れてるような気持ちでありました。それでどうもこの母とは時々ソリが合わなかった。「何言うとるかい」というような勢いでもっておっかさんがやるわけです。それでこの人はとにかく自分の内に出てこようとする燃え立ってくるところの才気を生かすのにしても、まだどうしても自分の環境というものがそれにぴったりしないでいたと思います。

赤坂・逗子・原宿・粕谷

私が十三歳の時に、赤坂の小さな家で、その夫婦が新家庭を持っていました。その新家庭におばあさんを迎えて、自分たちの母を迎えて御馳走をいたしました。ところがおばあさんはここへやってきて、その新家庭をぐるぐると見回したところが、小さな家で庭があ

る。その庭の中は草ボウボウとしておりました。母は何思うたか、「なんだなあ、まあ、この草取りもできんかい。暇のない人たちはしょうのないもんだ」と言って、そこへ座っておる間に人を連れてきて、全部その草を刈らせてしまいました。戻ってきて蘆花はその様子を見て、「まあ誰が人の許しも得ないで、うちの大事な草を刈ってしまったか。草を刈ったのは親切であるけど、主人の許しも得ないでこの私が大事に植えといた雑草を取ってしまった」と大変な不平でありました。

一事が万事で、あまりその母に対して心良く思いえないというようなことがらもちょいちょい重なり、あの人の書いたものを見ますと、そういう事柄が節々に出てきています。結婚式をする時にも着物はつくってあるけれども、いっぺんもその用意も支度もしないで、ぶっつけ本番に、すぐ着せてしまったということも、多分皆さん御覧になったと思います。そんなような調子でございます。しかし、ほんとうに持ってるところの魂とそれから力というものは、やはり、そういう中でも出てきました。例の「自然と人生」というようなものが初めに書かれた。これが一つの鋒鋩を表わすようになりました。何かこれはできるぞという気分を持たせるようになりました。

御承知のように、熊本にゼンスさんが見えました。ゼンスさんの弟子に徳富も行きました。もちろん徳富兄弟は年が若くって本式の弟子にはなれませんでしたけれども、あのゼンスさんの熊本バンドの仲間のとばしりを受けて、あそこでキリスト教を知りました。キリスト教を知った時に蘆花もその兄も非常に熱心になりました。それでゼンスさんがあすこをやめて、生徒を全部京都の同志社に、新島先生に引き渡しました時、徳富蘆花も兄について、十一歳から十三歳までこの同志社にきて学んだというのでございます。

その後、兄は東京に出てしまいましたが、蘆花は再び十九歳から二十歳の時、同志社にまいりまして勉強をいたしたのでございます。この際でございます。この蘆花がいわゆる青春の誤りと言えば誤りでしょう。青春のあやまちにおちいったという。それはほんとうに指導よろしきを得たならばそんなことにならんで済んだかもしれない。けれども、大事なこちらの一人の娘さんと親しくなって、まだ余りにも年も若いし、まだ時期も早いからやめろと言われて、やめて、またそれが燃え上がって、またやめて、三度目にとうとう東京からまた帰ってきた時に「もうあなたとは切れます」ということを言いに戻ってきておいて、またそれが十日も十五日も面会をしたりしているので、また燃え出し、その燃え出しかけたのを、今度は自分がびっくりして叩きけすように、火を叩き消すようにしてそれを打ち切った。それで娘さんは、大変反発をする。自分はひどい目にあう。そんなこんなでとうとう同志社を卒業もしないで、追われるようにここを出たそうでございます。

ちょうど兄は「将来の日本」というものを書いて家族を引具して東京へ行って隆々とやっていたもんですから、その方に引返した。そして二十七歳の時に、兄のめがねでこれこそ貞淑な娘、（熊本県）菊池の原田愛子という婦人を見たてて、これはお茶の水の出身の秀才でありました。おとなしい人で、きれいな人で、中肉中ぜいで小さくもない、大き過ぎもしない、どっしりと落ちついた立派な婦人でありました。その婦人を妻に迎えることになった。そして一家を

成したのでございます。二十七歳の時に娶ったその妻がほんとうに蘆花に対しては全身全霊をあげて奉仕したという事柄は、これは皆さんも御承知のことであると思います。

蘆花は御承知のように四十年の間次から次へと本を出しました。この人の一番の出世作と言いますのは、あの「不如帰」でございましょう。ホトトギス。武夫さんと浪子さんとのあのいきさつの本。これは映画にもなり、何かして皆さんも御承知と思います。ちょうど私が十五歳になって、東京の女子学院に勉強をし始めました時に、この徳富は「不如帰」を書いていたと思います。「たいへん評判だけれどもな」と思って私は時々新聞を見ておりました。この人は家を東京にもっていて、また今度家を逗子に移していきました。逗子は、ちょっと申し上げておかないと家の姿がわかりませんが、まだ逗子がちっとも開けていない時に、徳富はこの逗子に老人夫婦のため別荘をつくりました。その時に、逗子に行ってあの浜の入口のところに堂々とした立派な松の茂っているところを買いまして、そこに隠宅をつくり、老人夫婦がそこにおさまりました。蘇峰は毎週週末にそこに行って老人夫婦を見、家を見、お客が来ればお客にも会い、そして自分の仕事を済ましては東京に行きつ戻りつする。その脇に蘆花は家を借りて、夫婦でやっておった時代がありました。その時代に「不如帰」を書き、だんだん名前が出てくるようになりましたが、この蘆花の心の中に絶えず動いているところの自分に対する圧迫感、インフェリオリティ・コンプレックスと言いましょうか、姉たちも、兄たちも、姪でも甥でも俺を馬鹿にしているというような一種の感情が始終心にあったと見えまして、家庭生活がなかなかおだやかでない。妻は一人娘で、お茶の水の秀才で、勤めればその時分良人に負けないくらいな月給が取れる、それこそうってつけの素晴らしい奥さんでございますが、その奥さんと二人でくらしながらどうしてもおだやかな生活ができない。何かと言ってつまらぬことで腹が立つと、もう暴力を振うなんていうことを何とも思っていない。昔の家庭ですから「親父がおみゃあを打つぐらい」とこういう。おみゃあというのは家内のこと、亭主が家内を打つぐらいはそんなことといちいち問題にしちゃならぬぞ、というのが熊本の考えでした。それですからやっぱりそういうことも心にあったとみえます。叩くぐらいのことは一向平気であったらしい。しばしばそういうことをやりながらもキリスト教の教育を受けていますから、どうもこれじゃ俺もいけないなという感じはある。自分と戦い、境遇と戦い、圧迫と戦い、その戦いの合間にまた筆をとって書いていたというわけです。そうして次々にそういうものを書き始めましたが、どうも自分の生活に飽き足らない。それで何とかして自分の活路を開きたいという気持ちから、とうとう家をたたんで巡礼に出る。

私が十六、七歳というときに、この人たちは赤坂から逗子に、逗子から今度は原宿に移りました。初めて原宿に家を借りて、広々としたところに移りました。私はちょうど、東京に来て、学生生活も大分落ち着いたときでありましたから、その叔父のところへ行くのは非常な楽しみでありました。私の叔父の徳富蘇峰は青山に家を持ち、徳富蘆花は原宿に家を持ち、原宿と青山に、金曜日になると出かけて行く。それは私に非常な楽しみでありました。そうしてやっていますときに、その原宿の家もたたんでしまって巡礼旅行に出

た。その時は皆様も御存知でありますトルストイを尋ねた。ほんとにそれこそ乞食旅行ででもあるように、三等でも何でもかまわぬというような旅行で出かけていって、そしてトルストイを尋ねた。そしてあの人のヤスアナポリアナに行ってじっくりといろいろなことを見せられて帰ってきました。そのときのことはこの人の一生涯に非常に関係があったと思います。トルストイは田園生活を欲していました。この人「トキトミ」といって喜んで迎えたそうでありますが、一緒に馬車に乗って写真をとったのが今も残っております。

この蘆花がその次におさまったのが粕谷でございます。どうかして九尺二間でもかまわない、百坪でもかまわない、とにかく自分の土地が欲しい。心ゆくばかり自分で創造するところの土地が欲しい。家が欲しい。そこで自分の理想の生活をしたいという希望からあの粕谷というところを探しました。その粕谷のわずかな土地を、一反三畝ですか、その土地を買いまして、おんぼろのぼろ屋を一軒それにつけて、そこに入り込みました。粕谷に行きましたときにはこの人も自分の心が始めて伸び伸びとなったんじゃないかと思います。父母も迎え、また兄弟たちも迎えて幾たびか喜ばしい時を持った。御承知の「思いでの記」というのはちょうど原宿時代に書いておりましたが、粕谷に行きましてからは、「みみずのたはこと」を書きました。

あの「みみずのたはこと」をお読みになる方は、本当に、芋はロクな芋はできないけれども、その自然の美しさ、その豊かさ、面白さというものはあの人とともにお楽しみになるだろうと思うようなものを書き始めました。そして次から次へあれやこれやを書きましたが、その時にこの人にはどうしてもまだこれでは足らない、どうしても自分は本当にこの世に対してなすべきことがある。言わねばならぬことがある。それには自分自身というものをあらいざらい出してしまって、天下に向かって自分の再出発をしなければならないという心持ちになりました。

それで今度は一人で出てはならない、妻とともに行かねばならない。今度は二人でこの家を出るということになった。出かけるというときに、最初の旅行のときには妻は東洋英和にあずけて行きましたが、第二回目のときは夫妻そろって、しかも着物も、自分は日本服をこしらえる、妻には紫の重ねを着せるというようなことで、まるで例の「日子日女の民」というもので、妻の方もたいへん心が広広として喜んでいた。その時、蘆花夫人のうたいました歌は「いまぞ行く行くよと声をはげましてとせ昔のわれに告げばや」という歌があります。「今ぞ行く行くよと声をはげましてとせ昔のわれに告げばや」――十年前には夫だけ送って自分は本当にさびしい思いをして留守番をしたが、今度はその十年の後にここまで生いたってきて、今度は夫婦そろって出かけていく、まあまあ、これは本当に十年の苦労はあった、という喜びがそこに出ております。そして二人でその旅をいたしました。

御承知のように、あの「日本から日本へ」というものは、ずい分大きなものでございまして、読んでみると、御馳走を食べてこの人たちは歩いているのかなあ、先々でこれを食べた、あれを食べたということが山ほど書いてある。しかしそれはこの時のこの人たちの旅行の中には大きな一つの問題がある。何か。日本においてはこの

夫婦道というものが思うほどたってはいない。家においては夫婦は犠牲になる。妻はおいていかれる。何ということはない夫婦道というものは本当に立てられていない。私たちは日子である。日女である。ともに夫であり妻であり、これは人間の根源である。この日子日女というその土台を打ち立てなければならないという気分で全世界を歩いたので、まことに洋々とした気分で、至るところで快よい旅をして歩きました。

最後の解放戦と勝利

世界の旅行をすまして、再び粕谷に帰る。けれども粕谷に帰って第二回目の奮発というときになりますと、この人は非常に文学者としても苦労をしたんだと思います。私は彼らが夫婦話をしているのを聞いていました。「どうだ、君、丸裸で銀座の町を僕と一緒に君は歩けるか」と奥さんに言っています。そんなこと、まあ、何を言うとってだか、と私はその時にそばで聞いておりました。けれども、例の「黒い眼と茶色の目」を書いてからその次に「新春」を書き、その次に「富士」を書いたというときに、これは本当にそれこそ自分の青春のあらいざらいから始めて一家のあらいざらい、わが家族のあらいざらい、それを書きました。それで親類中では何といったか、「あれは本当にけしからんやつだ。親類中の悪口を書いて飯をくっている」といって、親戚中で噂するくらいで、「もう私はあんな本を読まないよ」というものもちょいちょいありました。家のものもそうであった。それで第一巻「富士」を書きました時にはみんなぎょっとしながらもついていきましたが、二巻目、三巻目となるとだんだんひどくなって、読み手も少なくなってきました。しまいには自分の骨もけずる、肉もけずる、というような勢いで、とうとう四巻目は書き終えはしたらしいけれども、本にはならず、出版はできませんでした。で、なくなったあとで愛子夫人があれを本にいたしました。それでとにかく、あれだけのものが出来上ったのでございますが、この人をずっと見ていますと、一体あの人はよかったのか、悪かったのか。どうすればあんなにわがまま放題で思う存分なことをやって、人のことも他人のことも遠慮会釈なく、やってやってやりぬけてしまったのか。どういうんだろうか、という気持ちがするわけであります。しかし夫婦道を立てようということと自分というものを人間としてたてようというところの戦いに、すべてのものを赤裸々に出してもやはりそこに立つべきものを立てていかなければならない、むろん世界の平和というようなところまで進んで、彼はやっていったのです。

その間に幾たびとなく、一番親しい兄と衝突をいたしました。第一の衝突は「黒潮」を書いたときに、黒潮社というものを作って民友社から出てしまいました。そのときは兄弟が青山と原宿とにおって、私は青山へ行って、その足でまた原宿に行くのですけれども、おじのおの字も言わないし、健次郎の健の字もいわないで黙って「さようなら」といって次の家へ行くというようなありさまでありました。けれどもとにかく父も母もこの弟息子がいちおう立つかと思ったときはうれしかったにちがいない。私はあの「黒潮」が出た時に叔父の口から「淇水翁がこれを祝にくれたよ」といって見せたのを見ました。金一円也だったと思います。祝いのお金。しかし黒潮社

の祝いとして祖父が与えたものである。

その後、二度目のときには粕谷にいましたけれども、門も何も閉じてしまい、父の死にも出て行きませんでした。父が死んでも葬式に行かないで、家で、父は解脱して天に行ったんだ、といって小豆飯をたいて家で父を送ったというようなことです。あれほど世間体を思う、またあれほど親孝行ということを思う、あれほど兄弟仲の悪いなんていわれたくない連中に、存分に勝手次第にふるまったというのはこれであります。しかし、そうやってどんな不便なこともどんな見苦しいことも、評判の悪いことも、みっともないこともつきのけて、是非とも言わねばならぬことを言い、すべきことはしなけりゃならない。こうして自分は新らしきものを日本の国家の中に与えねばならぬ。民族に与えねばならぬというところの赤誠は、身体の全身をもって戦い抜いたんだと思います。その間にキリスト教にどうしても戻らなければならないという心の動きから柏木義圓先生につきまして、夫婦が洗礼を受けたということであります。それで心においてはすべてそれらのことの準備はしておりますけれども、身体においてはどこのでにをはにも合わないような暮らしをしたと思うのでございます。

ですが母にも兄弟にも、その一番世の中で最大の問題人であった兄にも門前ばらいをくわせるほどのことをいたしましたけれども、最後に彼はどうしたか、上州の千明において病の床に伏して、もうむずかしいことがはっきりいたしましたときに、彼は兄に電報をうちました。兄はどうしていたか。兄はこれまた不思議な人であります。この人は強情で強い人間でありますけれども、家族に対しては実に絶対的な義務、責任を感ずる人でありました。それで弟に対してはいくら、背かれても手のひらの上で背いているように、自分の方からは戦いをいどんだり、腹をたてたりはしておりません。彼は絶えず「どうもすまんな、どうも俺は兄貴ぶりがよくないな」と思っていたかもしれません。しかし日に日に病あついと聞きましたときに、一年このかたというものは、遠出もしない、長い旅にも出ないようにして、弟からの電報がいつ何時くるかもしれないという心待ちをしておったらしい。それで千明から電報が来ましたときにすぐ馳せ参じました。そして兄弟の和解をいたしました。蘆花は最後に「兄さん頼むよ。」誰を頼んだか、自分の最愛の妻、蘆花夫人のことを、将来をあなたに頼む、蘆花夫人を頼んだのは自分を頼んだのと同じことであります。そして万事をゆだねて、心やすく彼は往生していったのであります。一生涯、戦い抜き、働き抜き、死力を尽くして自分の信ずるところに邁進して最後に土に帰っていって、安心して死んだのであります。

九月の十八日があの人の日でありますが、私はちょうどその時東京におりまして、電報が来たときに、母が行ってくるよといって出かけました。私の母はそのとき、相当の年でありましたけれども、伊香保にまいりました。「なぜあんたは死んだかい、こんなに早く」といいながら出ていったことを覚えています。とにかく私はこの蘆花という青年が六十年、そのうちの四十年をともかく苦しんで、戦って、そしてついにさぐるべきものを探りあて、愛すべきものを愛して、最後を遂げたというその姿を思いますときに、まことに言い尽くしがたいなつかしさを感ずるものでございます。

（牧師）

叔父・徳富健次郎

湯浅八郎

徳富健次郎について何か書くようにとのことであるが、私はかつて「健次郎叔父さん」と題して小文を書いたことがある。それは昭和十年十月、同志社創立六十周年記念誌「我等の同志社」に掲載せられたのであった。最近、蘆花の生誕百年を記念して、東京都近代文学博物館が「徳富蘆花展」を開催し、この「だれよりも鋭く真実に明治という時代に生き、時代の問題に真正面から取り組んだ文学者」の再認識、再評価に資することになったが、どうした風の吹き廻しか、私にも何にか書けとの依頼があった。私にもというのは、もう一人の寄稿者は武者小路実篤氏であるからである。

蘆花は実のところ私の少年時代の健次郎叔父さんとしてわずかに記憶に浮かぶにすぎないのである。したがって、今、私が何か書くとすれば、かつての小文と大同小異の内容に限られてしまう恨みがある。とにかく私は「蘆花展」のために大体つぎのような思い出と感想を書いて送った。

蘆花は、「血を吐く思ひで『富士』を書きましたものの、どれだけの方に御了解を頂いて居りますでせうか?」とは愛子夫人の述懐であるが、その「富士」第二巻に次のような描写がある。「其弟の谷雄は、剽軽な二度目の、大閤様の幼な顔をして、御所の周囲の小さな溝の流れにモロコが居る話や、近頃上方にはやるチャンコ節、ドンドン節を叔父に聞かせた。『まるい卵も切りよで四角ドンドン』といふのと、『まるい卵も切りよがわるい、四角ドンドン』といふのと、二つある。と話は中々精密であった。」

ここで御所とあるのは京都のそれである。谷雄というのは私のこと、谷雄からドンドン節の講釈をきいた叔父とは蘆花その人である。大閤の幼な顔といえば子猿のような面構えということに違いない。私をお猿のように剽軽な子供と観ていた叔父は、少年の私には何だか熊のような大きな図体、ずんぐり頭に恐ろしく深みのある大きな眼の持主であって、何となくこわいような、それでいてたまらなく懐しい人柄であったという印象が残っている。

＊

私の母は徳富蘇峯、蘆花の直ぐ上の姉であったから、私たちの家庭では蘆花は健次郎叔父さん、愛子夫人はお愛おばさんで通っていた。徳富淇水祖父母が逗子桜山に隠棲していたためか、私たちの子供の時分には、毎夏、京都から一家を挙げて逗子に避暑するのを最も楽しい年中行事としていたが、徳富の叔父に会うのも、この逗子でであった。その頃、叔父夫妻は三崎街道に面した柳屋というのを宿にしていて、「自然と人生」か何かを執筆していたかと思う。私は時々、姉や妹などと一緒にその柳屋へ勉強のおさらいをして貰いに行ったものである。叔父はいつも無口で小机にむかってしきりに筆を運んであり、お愛叔母さんは側で静かに画をかいたり台所で仕事をしたりしていた。叔父の癇癖は有名である。私たちのおさらいもお天気模様によっては、してもらえたりもらえなかったりであった。叔母から暴風雨警戒信号をだされて、椽にも上らずひそひそと引き返したこともあった。或る時は学習中どうしたことか天気工合が急変して、叔父はいきなり戸棚から夜具など手当り次第に引きずり出して投げとばし阿修羅のごとく荒れ狂った。私たちは何が何だかわからず、ただ恐怖にふるえながら呆然としてこの狂乱の叔父をながめたことであった。しかしご機嫌のよい時には全く別人のようにやさしい、釣り好きの叔父が櫓をこぐ小舟に乗せてもらって御最後川の芦の洲をめぐったり、漁師をやとって沖釣りにつれていってもらったことなども今は懐しい思い出である。

＊

私は明治四十一年同志社普通学校（中学）を卒業した夏、アメリカに永住するつもりで渡米することになったので、ある日、はるばる歩いて千歳村粕谷にお別れに行ったが、これが遂に最後の面接となってしまった。というのはその後一度帰国した時、訪問したが、当時は有名な門戸閉鎖、面会謝絶時代であったため、すげなく門前払いを喰はされたからである。

私が渡米する数日前、叔父は自分が愛用していたらしい黒皮の手提げカバンを餞別として私に贈ってくれたが、その内側に、

「エホバを俟望む者は新なる力を得む、また鷲の如く翼を張りてのぼらむ、走れども疲れず歩めども倦まざるべし

明治四十一年八月三日

餞以塞亜第四十章第三十一節

以送湯浅八郎君之渡米

於粕谷草堂　徳富健次郎」

と墨書してあった。これが私が後にも先きにも蘆花から貰ったたった一つの記念品である。私は最近、このイザヤ書の聖句は蘆花が、明治四十四年二月、あの有名な一高における講演「謀叛論」で勝利の悲哀を説いた際、学生たちを激励するために引用したことを教えられた。

以上は健次郎叔父さんについての思い出であるが、さて文学者としての蘆花の位置づけや評価などは到底私の如きもののよくするところではない。正直のところ、かつては「自然と人生」を愛読し、そのなかのいくつかの絶品を暗誦したり、「思い出の記」を涙読したりした私も、その後「日本から日本へ」で自らを第二のアダム、愛子夫人を第二のイブと称するに至った蘆花には、当時ただただ唖然とし、また憮然たらざるをえなかったことを覚えている程度の読

者であるに過ぎない。しかし、今にして思えば、「富士」について果して「どれだけの方に御了解を頂いて居りますでせうか?」との愛子夫人の切なる危惧と悲願とは、今なお大きな疑問として残されているのではあるまいか。たとえ作家としての蘆花の世評は、今回の生誕百年記念展が証しするように、ようやく批判的に正しく文学史的に高く固められつつありとはいいうるものの、一個の「人間」として、歴史の中の一人の日本人として、わけてもキリスト教文化に深く汲んだ日本人としての蘆花研究は、今後に大くのものが期待されるように思うのは間違いであろうか。

当今学界の注目をあびているキリスト教の土着の問題に関連しても、また東洋的思想文化の世界的発展の問題にふれても、更に同志社人としては同志社教育の意義と価値との問題に関しても、蘆花研究は興味ある課題ではあるまいか。それにもまして私は、蘆花研究を通して悪魔の子であると同時に、神の子でもありうる「人間」の認識と理解とに寄与するものが尠くないように思えてならぬのである、何故だかは自分でも明徴に解説はできないが。

＊

蘆花研究に関して私は一つの提案を考えさせられるものであることを附言したい。それは愛子夫人、私からいえばお愛叔母さんに関してである。蘆花をして蘆花たらしめたものは、元よりその天分によるところが大であったにちがいない、時代や環境の影響も尠くなかったろう。しかし、その天分があのように発芽し成長し開花し結実した背後に愛子というこれまた天分ゆたかな教養高い日本女性の存在を忘れることは許されないのである。したがって、愛子研究は蘆花研究に相関して同時に推進せられて然るべきものと思う。そして私はこの二つの研究を通して初めて人間蘆花のあの複雑にして時に怪奇な全貌を明らかにすることができるもの信じているのである。間違っているであろうか。

蘆花夫妻の夫婦喧嘩も相当なものであったようである。しかし、それは主として性格的なものであって、人生観や価値観に基づくものではなかった。だから両人はいわゆる一心同体の夫婦ということばが最もピッタリするようなカップルであったといえよう。情愛の機微にふれたその間の消息は両人の短歌からもうかがえる。現に蘆花展に出品されている藤花扇は、夫妻が「日本から日本へ」の刊行後、休養旅行の途中京都に立寄り、「黒い眼と茶色の目」の主人公、山本久栄の墓に詣でたあと、京極で蘆花が愛子に買って贈ったものであるが、その時両人は次のような贈答歌をとりかわしている。

「紫の君にゆかりの藤の花　とはにひらけとおくる小扇」
蘆花

「牙の扇ひらけば藤の花しぐれ　ふりはえて見るわが生うつくし」
愛子

またある年の夏の二週間を夫婦は備中玉島で過したが、その時、蘆花は

「人の子の貝堀りあらす砂浜を　平らになして海の寄せ来る」

と詠ったが、後にこれが歌碑として玉島の海岸に建てられたのであった。この碑が丘の上に移された時、愛子の歌も同時に歌碑にきざまれたが、それは、

「思い出の浪よる磯に心とぶ　詩碑に生命のよみがえる今日」

というのであった。両人は死別してもなお離れがたい二人であった。私は夫人が蘆花を葬むる時、石に彫んで蘆花の石槨にそえた悼歌に心をうたれる。

「白雲にしばしへだての二つ岳　ならぶは光り地に満つるとき」

＊

私情からすれば、お愛叔母さんは健次郎叔父さんよりも私にとっては有難い存在であった。というのは私の父がなくなった跡に独り淋しく代々木に住んでいた母を熱海の温泉宿につれだし、五十日ばかりの間、「姉妹というよりは母と女もただならぬ親しさ」で起臥を共にして、母をいたわり慰めてくれたのがお愛叔母さんであったからである。恐らく母にとってはこれが犠牲と苦難とに終始した七十六年の生涯中、一生一度の慰労でもあり、静養でもあり、悦楽でもあったかと思われるのである。かくして心なごみくつろぎいやされた母は熱海から帰宅して二週間後になくなったのであった。

私がお愛叔母さんを、特に晩年の叔母に限りない思慕と景仰をよせているのには、私は私なりに理由があるのである。叔母は晩年腸をわづらって大手術をうけ、肉体的には全く廃残の身となり果てたが、精神的には生気潑剌、心境は明鏡止水、神々しいまでに清澄真純な心の持ち主であった。キルケゴールのことばを借りれば、まさに「心の純潔」ピューリテイ・オブ・ハートそのものであった。人の心の隅ずみまでも透視するかのような叔母のこの「心の純潔」に直面しては、誰れしも一点の虚偽も擬装も仮借されないことを直覚せしめられたのであった。

私がいまここで、晩年の叔母のこの恐ろしく鋭どい「心の純潔」にふれたのは、ここに蘆花夫妻のあの比類まれな相克相和の生涯の秘訣が潜在しているのではないかと思うからである。

蘆花と愛子とは、それぞれ極めてはっきりした、或る意味では甚だ対照的な性格の持ち主であったように思われる。彼の激情とアンバランスに対して彼女の冷静さと良識とのコントラストは余りにも明らかであったといえよう。そしてこのことが一層、蘆花の憎愛を異常なものとしたかも知れぬ。そうであるとすれば、問題は何が彼ら二人をしてあれほどまでに長短あい補ない、冷熱あい融けあい、智情あい援けあって、二人のそれぞれの人間形成に、更その成熟を可能ならしめたのであろうか。ことばをかえれば、何か二人に共通した特質があったのではあるまいか。もしあったとすれば、それは何んであったのか。いうまでもなくこれは伝記学上の重要な研究課題であって簡単に解答は求められないであろうが、私はさきに述べた「心の純潔」そのものこそが、二人に共通した特質であり、この特質があったればこそ、蘆花をして日子日女というような常規を超越した想念をいだかしめるに至ったのであるまいかと考えるのである。いずれにしても残忍なまでに自己に忠実であり、自らに対して一点の虚偽おも假借しえなかった両人の人生行路を支配したものは両人に共通した「心の純潔」であったのではあるまいか。

（同志社評議員会議長）